

新学習指導要領を踏まえた、大学教育における「文章表現法」の在り方

——高大接続の視点から——

壬生里巳

はじめに

令和四（二〇二二）年四月より、小学校・中学校に続き、高等学校において施行された、新しい「学習指導要領（以下、「新学習指導要領」とする）」は、高大接続という意識が強く表れたものになっている。大滝一登氏が、

この改訂が、単に高等学校教育自身の視点からのリニューアルを目指すものではなく、いわゆる高大接続改革の一環として位置付けられていることから、義務教育と大学教育を「つなぐ」役割としての高等学校教育の在り方が強く求められているということである

と指摘するように^①、高等学校教育の在り方をめぐる問題であると同時に、それを引き継ぐ大学教育側もそれまでの「学び」をどのように伸ばして

いくかが問われることになる。特に、高等学校までに、主に国語教育で担われてきた意見文や報告文、小論文といった「書くこと」の指導は、大学入学後の専門分野に関わらず、レポートや卒業論文、研究論文等の作成に必要なアカデミック・ライティングの基礎となるからである。そのため、大学において「文章表現法」等の授業担当者は、高等学校での新学習指導要領における「書くこと」に関する指導内容を把握するとともに、現在、大学で行なっている授業の在り方を振り返り、今後の高大接続の進め方を模索していくことが求められている。

本稿では、高等学校での新学習指導要領における「書くこと」に関する指導内容を確認するとともに、日本女子大学文学部日本文学科の専門科目「文章表現法」の授業を振り返り、高大接続を意識した「文章表現法」の在り方について私見を述べたい。

一 高等学校の学習指導要領における「書くこと」の位置づけ

まず高等学校の学習指導要領では、「書くこと」の量・質を意識することが前面に打ち出されている。その背景には、平成二十八(二〇一六)年十二月の中央教育審議会答申で指摘された、高等学校の国語科の授業における「書くこと」の指導不足という問題がある。

○ 高等学校では、教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向があり、授業改善に取り組む必要がある。また、文章の内容や表現の仕方を評価し目的に応じて適切に活用すること、多様なメディアから読み取ったことを踏まえて自分の考えを根拠に基づいて的確に表現すること、国語の語彙の構造や特徴を理解すること、古典に対する学習意欲が低いことなどが課題となっている。

教材の読み取りに重きを置く「講義調の伝達型授業」に偏っているため、生徒同士の話し合いや論述といった「主体的な言語活動が軽視され」ているという現状を改善する必要性を指摘する。そのうえで、場面や目的に合わせて文章を作成したり、情報を取捨選択して論理的に述べたりする「書く」力の養成を求めたことがわかる。現在、大学での初年次教育の一つとして、レポートや論文を書くための講義を課すところが増えているのも、高等学校における論理的な文章を書くという指導が不十分なものであることを裏付けているのだろう。

そのため、学習指導要領では、「国語」という科目編成自体が大幅に見直された。二つの共通必修科目「現代の国語」「言語文化」と四つの選択科目「論理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探求」である。特に「論理」という点を全面に打ち出した科目を新設したところに、論理的な思考や文章力を強化しようという意図が表れている。また、これまで共通必修科目の「話すこと・聞くこと」及び

「書くこと」の領域に示していた授業時数を、「表1」に示す通り、複数の領域をもつ全科目について設定することで、「書くこと」にどの程度時間を割くべきかを明示し、どのような力を育成すべきかを具体的に説明したところにも特色が見られる。

例えば、「現代の国語」における「読むこと」が10～20単位時間程度、「話すこと・聞くこと」が20～30単位時間程度であるのに対し、「書くこと」は30～40単位時間程度

【表1】各科目の「内容の取扱い」に示された各領域における授業時数

	思考力、判断力、表現力等		
	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと
現代の国語	20～30単位時間程度	30～40単位時間程度	10～20単位時間程度
言語文化		5～10単位時間程度	【古典】 40～45単位時間程度 【近代以降の文章】 20単位時間程度
論理国語		50～60単位時間程度	80～90単位時間程度
文学国語		30～40単位時間程度	100～110単位時間程度
国語表現	40～50単位時間程度	90～100単位時間程度	
古典探求			※

(※「古典探求」については、1領域のため、授業時数を示していない)

と、「書くこと」にかなり比重を置く形となっている。また、「国語表現」以外の科目でも、「論理国語」は50～60単位時間程度、「文学国語」は30～40単位時間程度と「読むこと」の指導に偏らないような時間配当となっている。

ところで、必修科目「現代の国語」と選択科目「論理国語」は、どちらの科目も「実社会に必要な国語の知識や技能を身に付ける」ことを目標として掲げている。どのような指導が具体的に行われるのだろうか。

以下、新学習指導要領より、「思考力・判断力・表現等」および「言語活動例」の「書くこと」の項目を抜粋して概観する。

【現代の国語】

〔思考力・判断力・表現等〕

- ア 目的や意図に応じて、実社会の中から適切な題材を決め、集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して、伝えたいことを明確にするこ
と。
- イ 読み手の理解が得られるよう、論理の展開、情報の分量や重要度などを考えて、文章の構成や展開を工夫すること。
- ウ 自分の考えや事柄が的確に伝わるよう、根拠の示し方や説明の仕方を考えるとともに、文章の種類や、文体、語句などの表現の仕方を工夫すること。

〔言語活動例〕

- ア 論理的な文章や実用的な文章を読み、本文や資料を引用しながら、自分の意見や考えを論述する活動。
- イ 読み手が必要とする情報に応じて手順書や紹介文などを書いた

り、書式を踏まえて案内文や通知文などを書いたりする活動。
ウ 調べたことを整理して、報告書や説明資料などにまとめる活動。

【論理国語】

〔思考力・判断力・表現等〕

- ア 実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について、書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集、整理して、目的や意図に応じた適切な題材を決めること。
- イ 情報の妥当性や信頼性を吟味しながら、自分の立場や論点を明確にして、主張を支える適切な根拠をそろえること。
- ウ 立場の異なる読み手を説得するために、批判的に読まれることを想定して、効果的な文章の構成や論理の展開を工夫すること。
- エ 多面的・多角的な視点から自分の考えを見直したり、根拠や論拠の吟味を重ねたりして、主張を明確にすること。
- オ 個々の文の表現の仕方や段落の構造を吟味するなど、文章全体の論理の明晰さを確かめ、自分の主張が的確に伝わる文章になるよう工夫すること。

〔言語活動例〕

- ア 特定の資料について、様々な観点などをまとめる活動。
- イ 設定した題材について、分析したり内容を報告文などにまとめた
り、仮説を立てて考察した内容を意見文などにまとめる活動。
- ウ 社会的な話題について書かれた論説文やその関連資料を参考にし
て、自分の考えを短い論文にまとめ、批評し合う活動。

エ 設定した題材について多様な資料を集め、調べたことを整理して、様々な観点から自分の意見や考えを論述する活動。

「現代の国語」では、「本文や資料を引用しながら、自分の意見や考えを論述する」「論理の展開、情報の分量や重要度などを考えて」と、「論理性」を意識して書く指導を目指す。これは、中学校の文章指導で行われてきた「段落の役割などを意識して文章の構成や展開を考え」たり、「根拠を明確にしなが、自分の考えが伝わる文章になるように工夫」したりすること（中学校学習指導要領・平成二十九年告示）を深化させるものとなっている。加えて「実社会の中から適切な題材を決め」という観点から、手順書・紹介文・案内文・通知文・報告書・説明資料といった具体的な文書の種類を挙げた点に注目できる。これらの文章の作成においても、生徒にそれぞれ「読み手が必要とする情報に応じ」ることや「書式を踏まえ」ること、「調べたことを整理」することを意識させることによって、実社会の中で目的や意図に応じて適切な文章を書く力を養成するという目的を踏まえたものと言えよう。

続いて「論理国語」においても、「現代の国語」での学習を引き継ぐ形で、「実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄」を取り上げる。さらに、「自分の立場や論点を明確にして、主張を支える適切な根拠をそろえる」ことや「批判的に読まれること」「多面的・多角的な視点から自分の考えを見直したり、根拠や論拠の吟味を重ねたり」することを挙げ、「論理」的に書く指導を目指す方針が示されている。島田康行氏は、高大接続の視点から、「論理国語」がパラグラフ・ライティングの指導事項のほかに、語句・語彙についても、「これまで語句・語彙の学習は、評論教材などの中にたまたま出現した語句について意味を学んだり例文

を作ったりするにとどまっていたが、ここでは論証のあり方とともに、その過程で必要となる語彙がある程度体系的に学ぶことが想定⁽⁵⁾でき、「大学での指導の出発点を一歩前に出すことを可能にする」という期待を述べている通り、今後の大学でのアカデミック・ライティング教育を考えるうえでかなり有用なものになると思われる。その一方で、新学習指導要領で示された指針を実際の現場でどのように取り入れていくのか、またどのような指導を行うのか、各学校の裁量に任されているのが現状である。この点について、出身高校ごとに「書くこと」の指導をどの程度受けてきたのか、新入生を対象とする調査報告も参考⁽⁶⁾に出来るだろう。ただし、より学生の実態を把握し、授業に活用するためには、各大学に合った調査方法や設問の仕方などを検討していくことが必要である。それとともに、文章を書き慣れていない学生への対応について事前⁽⁷⁾に考えておくべきだろう。

なお、「論理国語」は令和五年度より展開する科目であるため、今後どのような指導がなされているのかを注視していきたい。

二 日本女子大学文学部日本文学科必修科目「文章表現法」の実践報告と課題

(1) 授業の目的と授業計画

ここでは、執筆者が令和四年度に担当した日本女子大学文学部日本文学科の「文章表現法」(十四コマ⁽⁸⁾)の授業実践について報告する。

本科目は一年次前期の必修科目である【表2】の授業計画に示す通り、オフィシャル文書から、専門的な内容・技術を要する論文に対応できる力を養成することを目的とする。なお、本科目は同一時間帯に四クラス

【表2】2022年度「文章表現法」授業計画

1	文章の種類と文章表現の基礎
2	著作権・インターネットの情報の扱い・ソーシャルメディアの利用
3	オフィシャル文書の書き方（1）
4	オフィシャル文書の書き方（2）
5	手紙の書き方（1）
6	手紙の書き方（2）
7	手紙の書き方（3）
8	文章の読み方、まとめ方（1） 要約の方法
9	文章の読み方、まとめ方（2）
10	文章の読み方、まとめ方（3）
11	論文の書き方（1）基本的なルール
12	論文の書き方（2）資料検索の方法
13	論文の書き方（3）引用の方法（書誌情報の示し方）
14	論文の書き方（4）論文・レポートの作成

開講し、同一シラバス、同一内容で展開するものである。
以下、各回の授業の内容を振り返り、その成果と課題について考えていきたい。

前半（第一回～第七回）は、主に実用的な文章の書き方を取り上げた。学生にとって比較的身近なSNSの利用の仕方からメール・手紙の書き方を通して、相手や場面に応じて適切な語句や文体を選択すること、決まった書式を用いることなど、「書く」うえでのマナーを習得することを目指す。これは、学生の授業に対する関心・意欲を高め、その後の主体的な学びにつながったと考える。特に、メールの書き方を学びたい、

と要望する学生も多い。これまで家族や友人間でのSNSでのメッセージのやりとりが主流だった新入生にとって、授業担当者にどのようにメールを送ったらよいかわからないという声をよく聞く。本科目においてメールの書き方を指導することは、このような新入生の大学生活での不安を解消するというメリットがある。さらに、相手に応じて適切な文章を書けるようになったと実感できることは、書くことにやや苦手意識を持つ学生にとっても、自信につながったと考える。なお、このメールの書き方の実践報告とその成果については、後述したいと思う。

また手紙の書き方は、多くの場合、国語科の教科書に付録として資料が掲載されるのみで、実際に手紙の形式に即して書くことは少ない。そのため、第五回の授業では、封筒の大きさ（角形・長形）、封筒・ハガキの書き方といった基本事項の確認から行うようにした。現在では、同窓会などの出欠の往復ハガキを受け取ることは少ないかもしれないが、社会人としてのマナーでもある返信欄の書き方などを実践する場を設けている。その後、教員が解説しながら、学生自身で添削することで、学んだ知識の確認とともに、文字の大きさや配置のバランスにも意識を向けさせることができた（資料1）。第六回は、文例を示しながら「前文・主文・末文・後付」という一般的な手紙文の構成を確認した。そのうえで、以下のような課題を出した。

【課題】手紙を書く

あなたは、卒業論文で『海道記』をテーマにして、鎌倉時代の道路について調べて書くこととしています。

調査の過程で、資料としてふさわしい古地図を、目白太郎先生が個人的に所有していることがわかりました。なぜわかったかといと、文京区

の地域新聞五月号に写真付きで掲載されていたからです。

あなたは、その古地図を資料として使うために、実物を見て調査する必要があると考えました。そこで、目白太郎先生に手紙を差し上げます。

目白太郎先生に手紙を書いてください。また、封筒の書式も完成させてください。

なお、目白先生は、日本女子大学の被服学科の先生であることが、記事に書かれていました。

インターネットを検索すれば、さまざまな場面に応じた文例が紹介されている。この課題では、それらの言い回しをつなぎ合わせて終わりにすることがないよう、また場面や目的に応じて適切な敬語表現を用いることができるよう、場面設定を工夫した。なお、手紙文を作成する際、学生にはインターネットで検索したり、周囲の人と相談したりしても構わないとし、まずは授業時間内に下書きを完成させることを目標に作業に取り組ませた。さらに早めに下書きを書き終えた学生には、終わった人同士で下書きを交換させ、誤字脱字のチェックの他、敬語表現などについても批評し合う機会とした。このように授業内で学生が書く時間を設けると、学生自身も集中して取り組むことができていると思う。課題は、次回までに教員が目を通し、敬語表現が不適切な箇所などを指摘するといった個別指導も行った。

第七回は、学生に課題を返却することから始め、二重敬語などの誤った表現や、相手に失礼な印象を与えかねない表現とはどのようなものがあるか、例を示しながら説明し、自分の下書きの見直しをさせた。また、模範的な学生の文例も紹介することで、どのような表現を用いればよいのかという学生自身の気づきにもつながるよう、心がけた。さらに、前

回の手紙文を推敲・清書させ、手紙を書くという課題の仕上げとした。下書き↓推敲↓清書という過程を経験したことは、以下に挙げる授業後の学生からの感想にもあるように、学生自身がスキルアップできたという実感にもつながっており、その意義は大きい。

- 手紙の書き方について自分では気が付かなかった失礼な部分や、それをどのように言い換えれば良いのかを学ぶことができて良かった。
- 提出した課題の返却時に、優れた解答を見本として全員に提示してくださったのが良かったです。それを二回目の課題提出の際に取り入れて、より良い言い回しを学ぶことができました。
- 自分の元の作品の改善点を知ってからもう一度書けた。

後半の第八回以降は、文章要約からレポートの作成方法を学ぶ内容とした。

第八回から三回にわたり、文章要約を取り上げる。初回は、その手順を確認し、段落と段落とのつながりを考えることの大切さを説明した。ここでも、高等学校で文章要約に取り組んだかどうかという経験の差が見られ、比較的早くまとめられる学生と、なかなかまとめられない学生の差が大きかった。早くできた学生には用意した解説のプリントを配布し自己採点をさせ、課題を難しく感じている学生には、簡単なヒントを与えながら自力でまとめられるようサポートを行った。初回は新聞コラム（天声人語）を八十字程度にまとめることから始め、徐々に課題文を長めにするという段階的な実践を踏ませることで、要約のコツをつかめるよう配慮した。特に、新聞コラムは、「生涯にわたる社会生活に必要な国語」力を身につけるといいう新学習指導要領の趣旨を受け継ぐものと

して、SDGsをはじめとする環境問題やその他の社会問題への関心に目を向けさせる点でも有用な教材である。また要約文のまとめにあたる第十回に用いた坂本太郎「菅原道真と遣唐使^⑦」は、先行研究を整理し、そこから自分の立場を打ち出し、論を組み立てていくという明確な構成であるため、次のレポート・論文の書き方へとつながる題材としても有効であった。ただ、要約文が完成した学生から、学生にチェック項目と解説を付したプリントを渡し、自己採点させた際、解答例の記述を写すだけになっている者もいたので、自己採点のやり方については、今後、もう少しやり方を工夫することが必要である。

第八回～第十回までの文章要約を通して、文章の展開を押さえる方法や作者の主張を確認する方法を身につけたところで、次の段階としてレポート・論文の書き方を取り上げた。ここでは、レポートを作成するための手順を学べるよう、テーマの設定の仕方、先行研究の調査方法、論の構成、考えを文章化するという流れを確認するシート(資料2)を用いて進め、学生自身が主体的に取り組めるように行った。

以上が、令和四年度「文章表現法」の大まかな流れである。

(2) 「メールの書き方」の授業実践と学生の感想

さて、全体の授業終了後に、学生の授業の振り返りのためのアンケートを実施したところ、役に立ったという回答が多かったのは、メールの書き方であった。以下、学生のコメントである。

- ・ 今までの授業では習わなかったから。大学生になり今まで以上にメールや手紙を書くことが増えるから。
- ・ この授業を受けた後、実際先生にメールを送る時があったので、迷

わず習った通りに送ることが出来た。

- ・ 大学生になり、教授にメールをする機会は多くなると思います。メールの作法を理解することは大学生活を円滑にできると思ったので、メールの書き方は必要だと思います。

・ 必ず使うにもかかわらず、正しい形式を教えてもらうことはなかなかないから。

- ・ これから先最も重要な内容だと思ったからです。未熟なもので、この授業内で初めて知った内容も多々ありました。就職し社会人になった際、相手が不快にならない文章を作っていけると思いました。
- ・ 社会にでたら、メールを使ったやり取りが増えると思うので、今うちにメール上のマナーを知れて良かったです。

一方、これらの学生のコメントからは、高等学校までの授業等でメールの書き方やマナーについて知る機会がなく、メールを書くことに不安があったことが伺える^⑧。

本授業では、ビジネスメールの型を示すとともに、学びのポイントとして、以下の五点に注意を向けた。

- 1、件名はどのように書いたら良いか？
- 2、本文の書き出しのマナーとは？
- 3、適切な要件の伝え方、メールの結び方とは？
- 4、差出人署名はどのように作成すれば良いか？

その際、なぜこれが大切なのか、悪い例と良い例を示しながら解説することで、学生にマナーの重要性を認識させることを心がけた。その後、課題(1)(資料3)として、インターネットの不具合により課題を提出できなかった学生の書いたメール文の問題点を指摘させ、課題(2)では、そ

れを改善するメール文を作成させた。このように学生自身に問題点を指摘させることで、先に学んだポイントを確認する効果があるとともに、改善するために何が必要になるかを考えさせることにもつながった。

さて、課題(1)に対する学生からの解答では、以下のように講義内容を踏まえて問題点を指摘することができていた(資料4 A 上段)。ここでは、学生から出た意見の一部を紹介する。

- ① メールタイトルで内容がわかりづらいので、レポートの提出期限を過ぎたことや自分の情報を含めたタイトルにする
- ② 提出できなかった理由を記入していない
- ③ 顔文字を使っている
- ④ 言葉遣いをもっと丁寧にするべき

課題(2)は、概ね課題(1)で指摘した点をきちんと修正することができていた。さらに、模範例を通して、提出できなかった理由を述べるだけではなく、今後、同じ失敗を繰り返さないために何ができるかを含めること、このメールを通して先生に何をお願いしたいのかを明確に示す必要があることを説明したところ、皆、熱心に自分の解答に書き加えていた(資料4 A 下段、B)。この結果、前述したように学生が今後にも役立つというコメントを得られたことから、相手に応じて適切な語句や文体を選択できるようなスキルを身に付けさせることも、「文章表現法」の授業に求められることであると再認識することができた。

(3) 学生の振り返りと今後の課題

令和四年度「文章表現法」の授業を振り返って見えてきた課題についても述べていきたいと思う。また本学科では、「日本文学の基礎Ⅰ」「日本文学の基礎Ⅱ」という専門科目において、それぞれ古典文学・近代文

学の研究の方法とレポートの書き方についても取り上げており、その点で本授業では実用的な文章表現にも対応する時間的な余裕があることを補足しておく。

続いて学生から寄せられた授業全体を振り返っての感想を取り上げながら、今後の課題についても考えていきたい。

(学生の感想から)

- ・ 文章表現法では社会にでた時の実際的な知識を学ぶことができました。また、レポートや論文などの引用方法などの大学が必要となる知識も学べました。
- ・ 毎回一つの課題を提出するので、しっかりと授業に取り組むことが出来て良かったと思います。
- ・ 考える時間を多めにとってくださり、時間配分を余裕を持って考え、てくださっていたのがありがたかったです。
- ・ 小テスト機能を使って定期的に復習してすすめることで、自分が理解していない部分を確認できてよかったです。
- ・ 手紙の書き方や文献の書き方などを実際に先生が採点してくださった点が、自分の回答のどこがいけなかったかを理解する上でとても役に立ちました。もう少し漢字のテストをやりたいかったです。
- ・ (取り上げてほしい点) 季節ごとの手紙(暑中・残暑御見舞い、年賀状など)の書き方

- ・ 論文や参考文献の調べ方について、もっと詳しく知りたいです。
- ・ レポートの書き方では、レポートで使える言葉の言い回しなども教えていただけたら、より良かったと思う。(傍線は引用者による)

以上のことから、社会に出て必要となるオフィシャルな文書の作成から専門的な内容・技術を要する論文の作成に対応する「書く」力の修得という目的は、ある程度達成できたと言えよう。

その一方で、「レポートで使える言い回しなどを教えてほしい」「論文や参考書の調べ方についてもっと詳しく知りたい」という要望があったことから、アカデミック・ライティングをどう教えるべきか、引き続き検討していく必要がある。それに加えて、本授業の受講者は日本語・日本文学に興味を持っている学生であり、ある程度「書くこと」に慣れているものの、漢字の誤りや二重敬語の使用、補助動詞や形式名詞を漢字で書くといった用字上のルールの認識不足という問題が多々見られた。

このうち、用字については授業の早い段階で扱うべき項目であったと思う。半期科目ですべての問題に対処することはできないが、以下の三点を提案したい。

第一に、初回の授業で、これまで、特に高等学校においてどのような「書く」経験を積んできたのかを確認するようなアンケートを実施したい。可能であれば、授業以前にアンケートを集計できれば、教員側が授業を進めていくうえで何をどこまで指導するかといった目安になるからだ。ただ、どのような問いかけが有効であるのかは、他大での調査報告などを参考に質問事項を検討していく必要がある。

第二に、同じく初回の授業で、アカデミック・ライティングで必要となる知識、例えば、レポートにふさわしい表現、文体、表記、用字について具体例を挙げながら確認を行いたい。場合によっては、ここで確認したような事例をすでに学んできたことがあるかを学生に尋ねてみることもできるだろう。そのうえで、学生には、今後、課題を作成する際に意識するように伝える。また、課題の自己採点、もしくは教員による添

削時には、採点表（チェック項目用紙）を配付し、その都度確認させることも徹底していく。チェック項目を通して、表現力・構成力などを「見える化」することで、学生自身のスキルアップにつなげていきたい。

第三に、復習教材としての小テストの活用である。令和四年度は、本学で導入しているMOE学修システムのE-learningの「小テスト」機能を用いて、授業時間内にメールや手紙のマナーに関することなどを確認するための小テストを実施した。自動採点機能により、試験締切後にすぐに解答・解説を学生と共有できる点は有効であったと思われる。ただ、原則として、授業時間内に課題を提出させたため、授業時間内に漢字テストや敬語の問題を実施する時間的な余裕がなかったのが、反省点である。そのため、漢字・慣用句・敬語表現などの知識を問う課題（自動採点機能を用いた小テスト）を復習用として出し、それらの知識の定着を確認するためのテストを授業時に実施することを提案したい。学生も、テストとすることで緊張感を持って課題に取り組むことができるだろう。

おわりに

さて、新学習指導要領の「国語」科の中で、以下のような点が目標として掲げられている。

- (1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
- (2) 生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を延ばす。

「生涯にわたる社会生活」が一つのキーワードとなり、今回、高等学校において施行された新学習指導要領では、実生活に置いて、場面や相手に合わせた適切な文体や表現を用いて、自分の考えを論理的に伝えることを意識したカリキュラムになっている。そのような高等学校での「学び」を大学教育では、それぞれの専門分野でのレポートや研究論文の執筆はもちろん、社会生活全般において必要なスキルとして、将来の就職やキャリアアップにつながる、重要な要素である。現在、学生自身が社会人としてのマナーの必要性を強く感じていることを考慮すると、引き続き、大学教育においても、その必要を満たしていく責務がある。それを行う役割も「文章表現法」の授業は担っていると考える。

なお、本稿中の新学習指導要領の引用は文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語』東洋館出版社、平成三十一年に拠る。

【注】

- (1) 大滝一登「新学習指導要領が目指す高校国語科像」、日本国語教育学会監修『シリーズ国語授業づくり―高等学校国語科― 新科目編成とこれからの授業づくり』東洋館出版社、平成三十年、八頁。
- (2) 『表1』は、『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語』（前掲書）第一章総説より転載。十四頁。
- (3) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語』一五九頁。
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_jcsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_002.pdf（令和五年一月二〇日閲覧）
- (4) 島田康行「知っておきたい高校「国語」改革―新しい学習指導要領を

読む」、春日美穂・近藤裕子・坂尻彰宏・島田康行・根来麻子・堀一成・由井恭子・渡辺哲司「あらためて、ライティングの高大接続 多様化する新入生、応じる大学教師」ひつじ書房、令和三年に所収、一四三―一四四頁。

(5) 『あらためて、ライティングの高大接続 多様化する新入生、応じる大学教師』の第一章「学生の実態に即して設計・実践する文章表現教育―大正大学の事例―」1.1春日美穂「高校における文章表現教育はどのように行われているのか―入学生の調査から見えてきたこと」、第三章「大阪大学が進めるアカデミック・ライティング高大接続」、3.1堀一成・坂尻彰宏「大学初年次生のライティング既習状況を探る」では、それぞれの在学生の高校時の学習状況を分析することで、「書くこと」に対する様々な背景があることを示している。

(6) 日本女子大学では一コマ一〇〇分授業を導入しているため、半期十四コマとなっている。

(7) 坂本太郎「菅原道真と遣唐使」『歴史随想 菅公と酒』中央公論社、昭和五十七年。

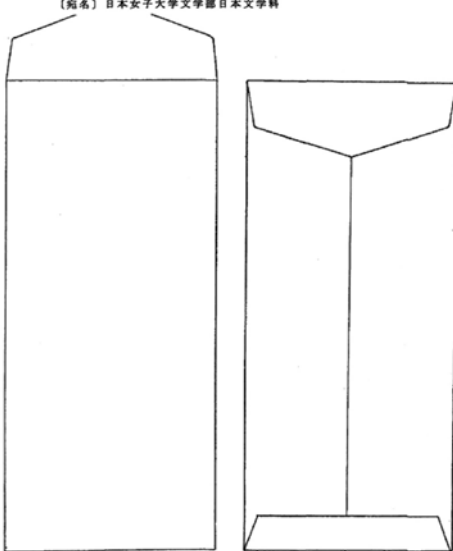
(8) 大学全体で行っている授業評価アンケートとは別に、授業終了後に令和四年度文章表現法Bクラス履修者に対して任意で行ったものである。

(9) ただ、メールの書き方が国語科教育の中に含まれるべきかどうかの判断は難しく、教育出版の「国語表現 改訂版」〔17教出 国表306〕で「電子メール」を取り上げているものの、あまり見られない。また手紙の書き方も「国語表現」では取り上げられることがあるものの、「国語総合」の教科書の中では付録の一つとして取り上げられる程度で、実際に学生が手紙やメールの書き方やマナーを知る機会は少ないと思われる。

なお、令和四年度「文章表現法」の共担者である岡島由佳氏、溝部優実子氏、八木京子氏およびBクラス履修者の学生、本稿をまとめるに際し、アドバイスいただきました福田安典氏に感謝申し上げます。

【課題】

(1) 下の図を使って、封筒の表書きと裏書きとを完成させなさい。
 差出人の住所（実際のものでもかまわない）も書き、また、切手の位置、その他必要なことすべてを記して、投函できる形に整えなさい。なお、宛先は、下記のとおりとする。
 【宛先】〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1
 【宛名】日本女子大学文学部日本文学科



学科	学年	学籍番号	氏名
学科	年		

(2) 下の図を使って、返信用原書を完成させなさい。
 なお、「〇〇会」は、縦罫式ではない。

112-8681

日本女子大学
日本文学科行

文京区目白台二丁目八十一

〇〇会

) 出席

) 欠席

) 住所

) 芳名

文章表現法・論文作成準備シート① 課題レポートのテーマを決め、研究対象を立てる下記の項目に基いて、それぞれ記入してください。

課題テーマ① 手紙 ② 書 ③ 書物 /

【課題1】テーマから選択する書物や作品、作家など、思いついたものを書いてみましょう。

***私が選んだテーマ(番号) ()

学籍番号 () 氏名 ()

【課題2】課題1より、今回の課題レポートのテーマを絞り込みましょう。

(1) 研究対象 (できるだけ具体的に設定する、文学作品の中の手紙の役割、古文書の様式、筆跡の真偽など)

(2) 研究の動機 (研究対象を決めた理由、何を知りたいのか)

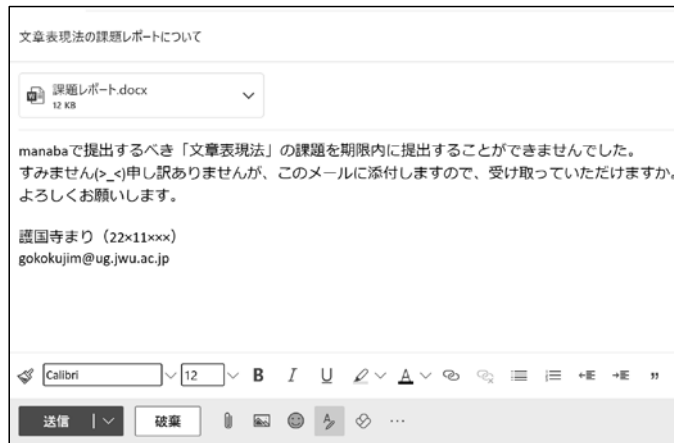
(3) 仮タイトル (できるだけ具体的な)

(4) 研究の目的 (何を問題とするのか、何を明らかにしたいのか)

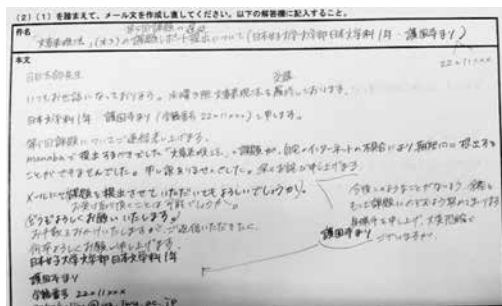
文章表現法 第3回 課題

あなたは、目白太郎先生の「文章表現法」(水曜3限)を履修しています。第5回の課題をmanabaの「レポート」に提出するように指示されていましたが、自宅のインターネットの不具合により締切の時間内に提出することができませんでした。そこで、あなたは目白太郎先生に急ぎメールを送信することにしました。

(1) あなたは目白先生にメールを送信しようと、以下のようなメールを作成しました。しかし、見直しているうちに第3回の授業でメールの書き方を学んだことを思い出し、このまま送信してはいけないと気づきました。問題点を指摘してください。



B



A

